

佳作

## 頑張り屋のおじいちゃん

長崎県 向陽高等学校一年 富田 二瑚

私が中学一年生の頃、おじいちゃんは亡くなった。とにかく子どもに優しくしてくれる人だった。私が小さい頃から、ガリガリ君のアイスを買ってくれたり、子どもが喜ぶことを常に考えて行動してくれる人だった。

そんなおじいちゃんは、仕事になると、顔つきが変わり集中して、目の前にある仕事を淡々とこなす人でもあり、憧れの存在だった。

そのため、おじいちゃんに小さい頃から、田んぼの手伝いや障子張り替えの手伝い、木の剪定の手伝いなど、色々教わってきた。小学校低学年の頃には、家族の手伝いとして学校帰りに、稲の苗に水を撒いて家に帰るのが日課となっていた時もあった。おじいちゃんの背中を見て、家族の仕事を精一杯取り組んでいた。

おじいちゃんは、綺麗好きな人でもあったため、常に家の中や家の周りは綺麗にされていた。仕事から帰ってきてすぐに家の周りの木を剪定したりして常に行動される方だった。

「人が死んでいろいろな感覚が無くても、耳の働きは、最後まで残っている」という言葉である。この言葉が頭に思い浮かんだが、「おじいちゃん！おじいちゃん！にこだよ！」ぐらいの言葉しか声をかけることができなかった。本当なら「いつもありがとう。仕事頑張りおじいちゃんが好きだよ」。そんな声かけをしたかった。でも、後悔しても後戻りは出来ないの、次にきりかえようと思った。

そういえば、おじいちゃんは、仕事を丁寧にする人や手際良くこなす人、そんな人が好きだと日頃から言っていたため、次は私が、おじいちゃんに見せる番だと思つて、今まで以上に学校生活や習い事を一生懸命取り組むようになった。

中学校生活では、学級委員長を務め、学級をまとめた。さらに中学三年生では、生徒会に入り、学校全体を引っ張っていく力を身につけることができた。

習い事では、小学二年生からピアノを習っており、中学二年生のピアノの発表会では、赤いドレスを身に纏い、ライトアップされたステージでショパンの曲を弾いた。弾いている時に、ふとおじいちゃんを思い出した。おじいちゃんから、エールが届いたような気がした。私は「よし。頑張りよう！」と心の中で決め、おじいちゃんに聞かせるように一生懸命気持ちを込めて弾いた。

私は、おじいちゃんが亡くなったことをきっかけに、

中学一年生の駅伝競技大会の日。駅伝大会が終わり家に帰っていた。おじいちゃん家の前を車で通ろうとする、道に穴があいていた部分をおじいちゃんが補修している姿が見えた。私は、「ああ、おじいちゃん今日も頑張りているな」と心の中で思い、車で通りすぎた。

家に帰って十分後、おばあちゃんからの電話が鳴った。「おじいちゃんが危ない！急いで来て！」

と焦っている声が聞こえた。私は急いで家族と駆けつけると、おじいちゃんが横になっていた。おじいちゃんはすぐに、救急車で病院へと運ばれていった。

私は、家に帰ってどれだけ祈ったことだろうか。後は、結果を待つのみ。自然と涙が出てくる。拭いても、拭いても滝のように。そうしていると電話が鳴った。おばあちゃんからの電話だ。

「おじいちゃん、無理でした。」

と声が聞こえる。その瞬間また、涙が溢れ、止まらなかつた。本当におじいちゃんは、最後の最後まで仕事をしついで、最後の最後まで家の掃除をして綺麗にして旅立った。素晴らしいな。最後まで、憧れの存在だった。

私はその後、頭で考える。「あの時、駅伝大会終わって車で通りすぎた時、おじいちゃんに心の声を口に出していればよかったのかな」「少しでも声をかけてみたら、また違っていたのかな」と色々頭の中で考えた。私は、どこかでこの言葉を聞いたことがある。それは、

様々なことに挑戦することができている。自分でも驚くぐらい積極的にになり、新しい自分を見つけることができている。これからおじいちゃん頑張り姿のように、私になつていく。次は、私の番。見ててね。